学習成果を学外に発信

ゼミナール活動

ゼミナールは、少人数教育による高度な知識・技術を習得し、学習成果の発表を行い、卒業論文を書き上げる場。指導の教員や仲間たちと密接にかかわることで、コミュニケーション能力も高められる。また、学習成果を学外に発信することで、人と社会、情報との出会いを生む場にもなっている。

渋沢栄一杯ディベートリーグ

経済・永江ゼミ 18人が初優勝

経済学部・永江雅和ゼミ3年次生18人が「第9回渋沢栄一杯経済史・経営史ディベートリーグ」で初優勝を遂げた。同ゼミは例年同大会に出場しているが、8回目で頂点に立った。大会の出場と成果は永江ゼミの学びの集大成。しかも今回は本学生田キャンパスでの開催。記念すべき大会を飾ることができた。発表の瞬間、涙と笑顔にあふれた。

MVPを獲得した淺水悠貴さんは「ゼミ生全員の努力で勝ち取った優勝」と胸を張った。永江教授は「チームワークの勝利。学生たちが教え合い、成長していったと教え子たちをたたえた。

10月9日の大会には、専大のほか慶應、大東文化、日本、高崎経済、文京学院、北星学園、関西学院、関西の9大学の経済史・経営史をテーマに討論するゼミが出場。「製造業の海外移転は日本経済にとってプラスであるか」のテーマに沿って、肯定側・否定側に分かれ論戦した。

1勝1分けで4大学が並び、総合ポイントで専大が慶應を破った。

▲ 真剣勝負　ディベート大会で＝生田キャンパス

「チームワークの勝利」

ここに来るまでの同ゼミの道のりは平たんではなかった。

参加者がゼミに入った当初は「まさかディベートをやるとは…」…。永江ゼミディベートを行った時は「まともな議論にならなかった」（亀山聡史さん）という。

そこで一人ひとりの発言能力を高めようと、多くの練習試合を重ねた。

テーマと対戦校が5月に決まると、データ集めから反論に対しても論破できる練習をした。夏期休暇期間中の合宿では、全員徹夜の議論で力をつけた。「勝ちたい」と思う気持ちが強くなりました」（山下修平さん）。

しかし、大会直前の9月の関西学院との練習試合では、「相手校に打ちのめされました」（有田淳さん。ここで、〝一から出直す〟再構築を行ったがバネになった」（有田さん、「人前でべる苦手意識がなくなった」（淺水さん）など、メンバーたちはい自信を持って、就職活動に臨んでいる。

同ゼミは、本年度育友会奨励賞を受賞している。

▲ 永江教授（中央）を囲んで喜びのゼミ生

大会前日は、夜遅くまで内容を確認し、勝率を1%でも上げようと最後の最後までねばった。

「ぼくたちでも、実戦と努力で常勝大学（慶應）に勝てる。『負けたら悔しい』と思う気持ち」（山下修平さん）。

のテーマは『観光』と聞いていましたから」（久保菜々美さん）。初めて

自分への挑戦だった「FUTURE 2011」　磯部　恒平さん寄稿

経営・石崎ゼミ

首都圏5大学（専修、上智、成蹊、東洋、駒澤）で広告、マーケティングを学ぶ学生有志による「大学生意識調査プロジェクトFUTURE2011」に参加した経営学部・石崎徹ゼミの磯部恒平さんに寄稿してもらった。2011年のプロジェクトテーマは「ポスト3・11の日本と、大学生」。学生1000人に、震災後の日本と自分の将来に関する意識調査を行い、12月に結果報告を行った。※専大参加者は磯部さん（敬称略）に加え▽佐々木翠さん▽高久峻二さん▽高野穂菜美さん▽千葉裕樹さん（いずれも3年次）の5人。

大学2年も終わりを迎えたころ、大学生活を振り返ってみると、何かに頑張ったという記憶がありません。中学・高校時代を振り返ってみても、常に無難な選択ばかりをしていて、他人に話せるほど頑張ったという出来事がありません。

このまま学生生活を何も頑張らず終えるのはあまりにもったいないと思い、少しは自分を追い込んでみよう考えたのが、FUTUREへの参加のきっかけです。

実際に参加してみると、想像を超える多忙なスケジュールが待っていました。週1回の東京・赤坂での定例会に加え、毎週出される課題をこなすために、週3～4日は他大学へ赴き、会議を行うという日々が続きました。このプロジェクトの活動期間は、夏休みを除く4～12月。大学3年次のほぼすべてを費やしたと言っても過言ではありません。実際、この1年間を振り返ってみてFUTURE以外の記憶はほとんどないくらいです。

プロジェクトに参加してくる学生はみな意識が高く、開始当初は学校間の壁をかなり重くしましたが、会議を重ねるうちに各大学からの参加者が、FUTUREのメンバーという一つのチームになりました。

メンバーとぶつかり合うことは、非常に刺激的な体験でした。8カ月間という短い間でしたが、濃密過ぎるほどの日々でした。

知識や経験、そして友人、私はFUTUREでさまざまなものを得ることができました。自分が成長したかどうかは正直分かりません。このプロジェクトで学び、得たものは、今後の人生に必ず生きてくると信じています。

▲ 石崎ゼミのメンバー（左端が磯部さん）

経済・徳田ゼミ　Xマスイルミネーションで長沢商店街活性化にひと役

▲ 訪れた学生によって書かれた色紙が店内を埋めつくす

経済学部の徳田賢二ゼミでは例年、多摩区の長沢商店街地域活性化活動に協力してきた。今年度はクリスマスイルミネーション企画「光・希望・絆イルミネーション2011」と題し、店舗に装飾を施し、クリスマス時期の商店街を盛り上げた。

12月23日には、長沢ひ街と専修大学から贈られた＝写真。生徒たちからは「参加できて楽しかった」、商店街の方からは「若い人との交流ができた」など、それぞれ感想が寄せられた。

専大とともに　生田探索

連載中の「専大とともに　神田神保町探索・特別編」として「生田探索」をお届けします。生田キャンパスの周辺で学生たちに人気のあるお店やスポットを紹介します。取材は、樋口博美ゼミ、山田健太ゼミで社会学とジャーナリズムを学ぶ内藤大地さん（文4）。

◇

向ケ丘遊園駅北口から5分の場所に位置する季節料理のお店「永花」。営業時間には、専修大学はじめ、多くの学生たちでにぎわう。サークルやゼミ、コンパや飲み会に利用されることも多く、学生アルバイトを雇うなど専修大学とのつながりは深い。

火鉢が置かれ、レトロな雰囲気が漂う店内には、訪れた学生

▲ 「東京のお父さん」と慕われている店主・石原さん

名物大盛りカツ丼「モンブラン」　店内は学生からの色紙で満艦飾

レストラン　永花

によって書かれた色紙がたくさん飾られており、専大生とお店の深いかかわりを知ることができる。これまでに書かれた色紙はなんと400枚を超えているそうだ。

「永花」が現在の場所に開店したのは1963（昭和38）年。今年で54年目、店主である石原昇さんは2代目になる。

名物はモンブランという名の大盛りカツ丼。おわん7杯分ほどのごはんに、卵でとじた大きなカツ。若い学生のお腹を満たすメニューとして大人気だ。この名物誕生のきっかけは、いつもお腹をすかせた常連学生が満足する料理を食べさせてあげたいという思いからだった。

「永花」のもう一つの魅力は、ご主人はじめ、お店の方々の〝ったかた〟。心置きなく話ができる場所を提供したい――そんな思いがあふれるお店には学生が気軽に来られ、何時間でもいることができる。

ご主人は学生の悩みの相談相手にもなり、アドバイスをすることもある。地方から来て、ご主人を「東京のお父さん」と呼んで慕っている学生も多い。

ご主人は、卒業後もお店に来てくれていた学生の顔と名前を覚えており、社会人になっても連絡を取り合って悩みなどを聞いているそうだ。

今回、「学生のうちにかできないことも多い。なにごとにも本人がやる気をもって取り組むことが大切」という学生へのアドバイスをいただいた。

「若い人たちと話すことは、私の喜び」とご主人。「永花」は現代社会で忘れられがちな人のつながりの大切さを教えてくれる。

※永花＝神奈川県川崎市多摩区登戸21-16　☎044・911・3405

メディアプロデュース応用演習成果発表会

ネットワーク情報学部　学習の成果を発信

コンテンツデザインプログラム

登戸小6年生「理科」の体験型学習教材を開発

ネットワーク情報学部2年次応用演習コンテンツデザイン（担当：上平崇仁・栗芝正臣准教授）を学ぶ38人が、多摩区登戸小学校6年生の理科「大地のつくり」の学習に関連した体験型学習教材を開発した。

この取り組みは多摩区・3大学連携事業※として、多摩区の受託を受けて行われているもの。

12月19日、同小学校で地層・化石・火山について理解を深める教材を披露し、交流を深めた。

38人が8つのグループに分かれ、テーマに沿って、教材を披露。約140人の生徒たちは地震の仕組みを体感しながら、模型とパソコンを連動させて地震による液状化現象の仕組みの理解を深めた。

クイズ形式で火山噴火についての質疑応答もあった。

地震の仕組みについて担当した清水輝さん（ネット情報2）は、「パソコンと連動させて模型を動かす電子技術的な知識が必要で、小学生の知りたい内容を引き出し、わかりやすく説明し理解させることが難しかった」と語る。

※2011年度の事業名。多摩区の自然環境への理解を深める体験型学習コンテンツ」

▲ 熱心に話を聞く児童

多摩区・専修大学のCMと市民活動団体のPR作品披露

ネットワーク情報学部メディアプロデュースプログラム（福富忠和教授・藤原正仁講師・杉田このみ非常勤講師）2年次生による成果発表会「たません」展が、1月26日、生田キャンパスで開催され、昨年9月から15週にわたって取り組んだ応用演習の成果が紹介された。

展示・上映されたのは、個人で制作した多摩区と専修大学のCM41作品と、グループで制作したたかわさき市民活動センター登録1団体のPR作品。発表会では、CM部門の優秀な4作品に多摩区長賞など4つの賞が授与される表彰式が行われ、もに学生たちが一斉にクラッカーを鳴らして互いの健闘を讃え合った。多摩区のCMで多摩区長賞を受賞した小川紗由莉さんは「作品を30秒にまとめるのに苦労しました。